

といへり。賞銅定則には、國次は應仁の頃にて、加賀青江と云ひ、家次は加州能美郡能美村に住すと。能美郡名蹟誌に云ふ。能美村に今本願寺の道場あり。此八・九世の祖に將監家次とて、刀銅鍛冶の名高き者あり。文明年中蓮如上人の門徒となり、一劍を煉うて蓮如上人へ献す。上人喜悅せられ、謝禮として彌陀名號の一紙に、自筆にて文明六年五月廿八日蓮如願主性賢と裏書し與へられたりとて、今此道場に傳れり。是は將監と云ふ俗名をば、其唱へのまゝに法名性賢となし書き與へられしと也。此鍛冶は同銘三代。將監家次は此村の橋爪に家居せし故に、此刀劍を橋爪物といふなり。四代目より末も代々家次とて、貞享年中まで、此村に有りて刀鍛冶を業とし、其後は此業を止めて農業をなし、淨土真宗の道場と成りたり。又此家の何代目なるか、寛永年中次男に家吉とて、此村の内へ別家したる一代鍛冶あり。此子孫も今は農業のみにてありけり。といへり。改作所舊記に載せたる貞享三年六月刀鍛冶取調書に、家次と申鍛冶之末、能美郡能美村に今以有^{アリ}。と見^シ、鍛冶系圖にも、六代目家次貞享の頃存生。とあり。されば貞享年中

月廿八日蓮如願主性賢と裏書し與へられたりとて、今此道

○鍛冶勝家傳

刀鍛冶系圖に云ふ。元祖勝家は越前の住人國守の子孫にて、三代目國守の子也。初代國守は來國安の弟子也。勝家は陀羅尼の祖にて、三郎右衛門と稱し、加州に來住す。二代勝家は新助と稱し、嘉吉の頃加州金澤に住居す。此後代々同銘にて、四代勝家は彦市と云ひ、慶長の頃也。此子孫勝重も彦市と稱し、貞享の比加州小松に住す。又彦市勝家の兄善三郎家重と云ひ、其子二代家重も善三郎と稱し、寛文元年に受領して伊豫大株橋勝國と改稱す。此子二代勝國善三郎の弟を勝家善八と稱す。貞享の比存生す。とあり。按するに、享保五年勝國・家忠・光平等の由來書に、元祖勝

家三郎右衛門は、二代將監家次の弟子にて、是より陀羅尼と號す。三郎右衛門勝家の子家重善三郎は、利家卿の時打物被^{シテ}仰付、天正之頃病死すと記載すれど、二代將監家忠の時代と違へり。由來書は過聞なるべし。

○鍛冶勝國傳

刀鍛冶系圖に云ふ。陀羅尼の祖三郎右衛門勝家より三代目勝家の子忠助家重、其子善三郎家重、其子善三郎家重寛文元年に受領し、伊豫大株橋勝國と改稱す。其子を善三郎勝國と云ひ、貞享の頃存生。とあり。享保五年正月勝國善三郎の由來書に云ふ。元祖勝家三郎右衛門は、二代目將監家次の弟子にて、是より陀羅尼と打ち、其子家重善三郎は、利家卿の時打物被^{シテ}仰付、天正之頃病死。二代家重善三郎は、初代家重の三男にて、利長卿度々打物被^{シテ}仰付、正保元年病死。三代家重善三郎、利常卿の時打物被^{シテ}仰付、四辻大納言殿へ被^{シテ}仰付、伊豫大株橋勝國と受領仕。先祖以來藤原氏之處、是より橘氏に被^{シテ}成下、綸旨戴仕、寛文十二年病死。四代目勝國善三郎、寶永元年病死。五代目勝國も、善三郎と稱す。とあり。又同年幕府への上申書に、陀羅尼橋勝國

善三郎は、二代目將監家次流にて、先祖勝家より六代家業相續仕り、打物宜しく仕る。と載せられたり。貞享元年の鍛冶の取調書に、兼若勝國をば上作の一・二とす。加越能鍛冶由來考に、寛文の比伊豫大株勝國と云ひ、其子陀羅尼勝吉則ち善三郎と云ふ。已上七代也。と載せたるものは、元祖勝家よりの代數なり。此の後々も子孫連綿せり。寶曆元年の調書に、勝國松戸善三郎とあり。天明三年の飛鳥川記には、御刀鍛冶二拾俵松戸善太郎勝國と記載せり。按するに、元祖勝家以來、陀羅尼を家の稱號とせしは、如何なる由縁より起りけん。其の由來を記載せしもの未だ見當らず。三壇記に、金澤山崎町田上屋彌右衛門といふ者の妻は、陀羅尼鍛冶次兵衛といふ者の娘なるが、陀羅尼鍛冶吉兵衛の第六藏と云ふ者と密通し、彌右衛門を殺害するに付き、元和四年の春泉野に於て釜煎の刑に處せらるよし見にたり。右陀羅尼鍛冶次兵衛吉兵衛も、皆勝家・勝國の一族にて、其の比一類多かりしと聞ゆ。

○鍛冶光國傳

刀鍛冶系圖に、三代目勝家の子初代家重善三郎の二男、光